



雲南省調査報告

榎根 勇*¹・藤田佳久*²・宮沢哲男*³・大澤正治*⁴・朱安新*⁵

[調査期間] 2005年8月10日～8月26日

[参加者] 榎根勇、藤田佳久、宮沢哲男、大澤正治、朱安新、宋献方、李発東、張秋英（一部参加）、蕭穎（一部参加）

[コース] 北京⇒雲南省昆明⇒景洪(西双版纳、シーサンパンナ)⇒大理⇒麗江⇒シャングリラ(中甸、香格里拉)⇒昆明⇒東川⇒昆明⇒北京（⇒空路、⇒陸路）

[目的] 生物多様性、持続可能性、退耕還林、土石流災害、荒山造林、少数民族、観光開発、流域管理、自然エネルギー利用、NGO活動などの実態調査

昨年度のフィールド調査報告書とは異なり、本年度は報告書の前半を日本側参加者全員の共同執筆による、入手した環境情報の客観的な整理にあて、個人的な意見は後半に署名入りで述べてある。雲南省は辺境に位置し、急速に変化しつつある省であり、現地の案内をお願いした北京在住の中国科学院地理科学与資源研究所の宋献方教授にとっても最新の情報の入手は容易ではなく、当初に立てた計画を少し変更して、現地での調査の手配は旅行業者に依頼した。そのため一部は観光コースを回るようになったが、逆にこのことが幸いして、これまで見落とされやすかった「環境と観光」という重要な視点を発見することができたのは大きな収穫だった。この報告に記した情報は、インタビュー、ガイドの説明、パンフレットや地図、若干の図書から得たもので、その内容が科学的にすべて100%正しいと断言することはできない。ただし伝聞情報のすべてを間接話法で記述すると煩雑になるので、入手した情報をそのまま断定的に記しておいた。この報告に載っている情報を再引用される場合にはこの点に注意していただきたい。なお、宋献方教授にもこの原稿に目を通していただいた。

*¹ 愛知大学COEフェロー

*² 愛知大学文学部教授

*³ 愛知大学経済学部教授

*⁴ 愛知大学経済学部教授

*⁵ COEリサーチ・アシスタント

調査日誌

8月10日(水) 宿舎は北京の華北大酒店 ★★★

榎根は成田から、藤田、宮沢、大澤、朱の4名は名古屋から北京入り。中国科学院から空港への出迎えがあった。人民元を2.1%切り上げた影響で14.6円=1元。ホテルにチェックイン後、同ホテルで夕食を兼ねて12月の国際シンポジウムについて、中国人民大学の環境セッションの責任者に決まった鄒驥教授と中国科学院の関係者を加えて、実施方法の打ち合わせを行った。出席者は鄒驥、劉昌明、宋献方、李発東、王(人民大)、加々美、藤田、宮沢、大澤、朱、榎根の11名。環境研究会主査の榎根が用意した下記の提案がそのまま承認された。シンポジウム当日は、鄒驥さんは公用で海外出張することになるが、代理をたてるので問題はないだろうとのこと。可能な限り人民大の大学院生の発表も認めることとし、大学院生が参加しやすいような場所を会場に選ぶことになった。会場の選定は人民大学に一任した。なお、中国科学院地理科学与資源研究所の李発東さんは今年の10月から千葉大学へ日本国国費留学生として来日することに決まった。

記

《2005年8月10日打ち合わせ会用資料》

2005年7月16日開催の環境研究会の結論

1. 過去2年間の活動で、中国の環境問題の現状はある程度わかった。
「中間報告書」がまとまった。その中文版も準備中。
2. 「最終報告書」を明確な方針の下でまとめる。その際に重要な点は、
 - ①日本人が中国の環境問題を研究することの意味。
 - ②中国人が日本人と中国の環境問題を論じることの意味。

2005年2月4日の環境研究会の結論(要点のみ)

3. 愛知大学のCOE-ICCSとしての特色を出す。
4. 最終報告書は長期的視点に立った恒久策を提案する。
5. 東アジアは環境運命共同体であるとの視点が重要。
6. 人口、地球環境、食糧、水などをキーワードにして将来を展望し、環境の視点から提案する。
7. 環境意識を一般人や学生に普及させる必要がある。

2005年12月の国際シンポジウムの方針(案)

8. 2の①と②を考慮して、発表者が任意に選んだ中国

の環境問題に関するテーマを例に、各自の環境論を展開してもらい、それについて質疑を行う。シンポジウムの実質的な内容が「現代中国環境論をめぐる日中の環境学者による対話」となるようにしたい。

9. 環境研究会メンバーには、8の内容を発展させて「最終報告書=現代中国環境論」としてまとめてもらう。
日本語版：岩波書店か東京大学出版会、350頁、2007年3月発行(予定)

中国語版：出版社未定

論文執筆者には原稿と引き換えに若干の研究費を支払う予定。

原稿執筆に関する詳細については後日連絡する。

10. 環境研究会メンバーの全員(海外出張中の後藤氏を除く15名)にこのシンポジウムへの参加を呼びかけたい。

8月11日(木) 昆明 桜花酒店 ★★★★★

北京の朝のテレビで日本の上戸彩の映像が流れていた。外はスモッグで少し臭い。9時20分にホテルを出るが、中国東方航空の出発が1時間遅れたため、昆明に着いたのは16時頃、飛行時間3時間。輸送中に榎根のトランクが一部破損したため、航空会社と交渉して、代替の少し小型の中国製トランクを1個弁償してもらった。幸いにも榎根のトランクは無事に成田まで使用に耐え、代替のトランクは旅行中朱安新が使用した。昆明市の標高は約1900mで、人口は都市部で300万、全域で500万の大都会だが、北京と違って空気は清澄で、空は青い。大通りは広く、緑の多い、きれいな街である。しかし空港でも、大通りでも、乞食(その多くは身体障害者)がしつこく物乞いをしてきた。社会主義国を標榜している国で弱者が救われていない。桜花酒店は市街地図にはHolyday Innと記入してあり、内部はアメリカ仕様になっていて便利。今夜は中国の七夕にあたり、ガイドさんから人民公会堂で楊麗萍女史主演の雲南映象「大型原生态歌舞集 A Grand Primitive Song & Dance Medley」があると聞き、この2時間のダンスを全員で鑑賞した。少数民族性と原始性を強調した創作舞踊で、第一場：太陽、第二場：土地、第三場：家園、第四場：火祭、第五場：朝聖と続き、プロローグが孔雀の舞であった。楊さんはテ

レビ出演も多い中国の有名人で、大理白族出身の48歳と聞いたが、30歳代にしか見えない。細くてしなやかな腕と指を華麗に動かして舞う「孔雀の舞」が特にすばらしい。5場構成の太鼓と民俗舞踊のメドレーは「縄文と岡本太郎」的感性に通じるものがある。少数民族の踊り子たちは、みな小顔で、細くて、きれい。入場料は安くはないと思われるのに会場は満員。政府の少数民族政策、宗教的色彩の強い演出の容認、地元の人々の芸術への強い関心などを知ることができた。でも会場は少し騒がしかった。

8月12日(金) 昆明 桜花酒店

雲南省のホテル代は朝食込み。朝食の客のほとんどは中国人の団体客。ホテルの前には観光バスが待機している。中国ではすでに団体旅行ブームが始まっている。ホテルのバスルームには売価1個5元のコンドームが置いてあり、外には「防治艾滋病(エイズ)」の大きな看板。胡錦濤主席は世界に中国のエイズ撲滅を宣言したばかりであるが、観光と貧困とセックス産業は不可分。昆明市の周辺部では住宅団地の建設中で、100万円で100m²のマンションが購入可能。中国の建設ブームは臨海部だけでなく、内陸の雲南省にまで及んでいる。その新築マンションの一室に、NGOの雲南生態網路(Yunnan EcoNetwork)のコーディネーター(協調人)である陳永松氏を訪ねる。



【写真1】調査隊一行と陳永松氏(前列中央)、雲南生態網路にて

www.yunnaneconetwork.cn

以下は陳さんから聞き取った内容である(写真1、写真2)。

私(陳永松)は大学で英語を専攻して1985年に卒業し、85~88年の3年間は政府機関で働き、その後は会社を経営していた。89年に中、独、米、蘭のNGO共同プロジェクトが始まった時、雲南省にはNGOの窓口がなく、外国が輪番制で窓口を担当し、NGOの窓口の必要性が認識された。99年には「昆明園芸(Horticulture)万博」で働いた。01年1月に私が責任者になってこの組織を立ち上げた。目的は、①再生可能エネルギーの普及、②環境保全活動、③環境教育、④緑色奧運列車活動(Green Olympic Train Program)である。雲南省には(後述する)于さんの組織を含めてNGOは7~8組織あるが、coordinationを行っているのはここだけ。リオサミットの10年後に開かれた、持続可能な開発に関する2002年のヨハネスブルクサミットには、中国草根環境組織参与可持續發展世界首腦會議(Chinese Grassroots Environmental NGO's Participation in the World Summit on SD)の一員として参加した。この会議には中国から130人も参加したが、その中で私のようなNGO活動を行っていたのは10数人にすぎない。ただしNPOはたくさんある。01~03年の2年間、英国環境基金からの資金援助を得て「推



【写真2】雲南生態網路で一行に資料の説明をしてくれる陳永松氏

進可持続発展行動計画 PSDAP: Promotion of Sustainable Development Action Plan」に従事した。資金は5万ポンドで、目的はヨハネスブルク会議に向けた戦略形成。その後、北京の中国農業部へ1年間出向し、中国とドイツの仕事に従事した。現在この組織では3人のボランティアが活動している。日本のNGOとも連携し、太陽光発電の普及にも関係している。①ではバイオガス（個別糞尿処理）施設をボトムアップ方式（草根行）で今年だけで100万戸を設置した。政府の目標は今年中に200万戸。設置費用の7割を政府が援助し、3割は個人が設置に必要な労働力を提供して負担する。費用は1戸最低でも2000元、普通は2500～3000元必要。これまでの実績では120万戸は成功しているが、2～3割は何らかの問題があるか、未使用。気温の高い低地では成功し主として家庭用燃料に使っているが、低温の高地ではうまく機能しない。再生資源法が05年2月に承認され、来年から実施されることになる。政府との関係はうまくいっているが、NGOに関する法律はない。企業にはまだ環境保護運動を積極的に援助しようという意識は育っていない。④の活動では「一株樹苗」行動を実施した。植樹は50年間管理する。②と③に関して以下の活動も行った。また英国環境発展基金（British Environment Funds）の援助で169頁の『長江流域——共同的関注与思考』を出版した。その内容は02年5月に昆明で開かれた「長江流域可持続発展国際討論会」と02年11月に重慶で開かれた「中国西部地区生態保護与可持続発展推進会」の発表論文をまとめたものである。また私が編集したパンフレットの1つに24頁の『生活？ 生存？ Livelihood? Existence?』があるが、これも英国環境発展基金で印刷されたものである。

2001～03年 PSDAP in Yunnan

2001年7月 The 1st Student Seminar on Promotion of SD Action Plan

2001年12月 Protect Mother River and Dianchi

Lake—We are Taking Action

2002年3月 The International Seminar on Simao Rural Environment & Health SD—Taking Biogas as a Bridge for the Building of Bio-Village

2002年4月 A Seminar on Building up Public Awareness Among Students to Achieve Sustainable Wild Protection and Animal Welfare in Wenshan Prefecture

2002年5月 An International Seminar on SD of the Yangtze River Basin

2002年7月 A Student Seminar on SD (1)—A Spaling Caring Action Plan

雲南省は山西省に比べると共産党のスローガンを示す看板類は少ないが、それでも「保持共産党先進性……」「実現水資源可持続……」「創建国家衛生城市 改善春城投資環境」などを見る。春城は高原都市である昆明の別称。昼食は93年創業の愛尼山荘でアイニ民族料理、7人で270元。ここで働く女子の月給は500元(写真3)。雲南では、漢朝に漢族の王が「庄躋入滇」し滇国と呼ばれていたため、滇（テン）の字が良く使われている。例えば緑茶に「滇緑」、紅茶に「滇紅功夫茶」の



【写真3】民族衣装を着た愛尼族の娘さん



【写真4】滇池の湖岸



【写真5】滇池の水質を調査中の李発東さん

名がある。昆明市街の南にある滇池は、巢湖、太湖とともに中国で汚染の最もひどい「三湖」として悪名が高い。滇池の湖面積は本来の800km²から300km²に減少している。もともと流入する河川水が少なく、水深も15mと浅く、主な水源が降水であるため、湖水の入れ替わる速度が遅い。政府は2億人民元をかけて水質改善中だが、もとの状態に回復するのは容易ではなかろう。湖岸での測定値は、導電率：469 μ S/cm（マイクロシーメンス/センチメートル、以下この単位の記入を省略する）、pH：9.63、水温24.2 $^{\circ}$ C、北緯（N）24 $^{\circ}$ 57'42"、東経（E）102 $^{\circ}$ 40'25"、標高1891m。異常に高い導電率と強いアルカリ性が汚染のひどさを示している。湖水はアオコの増殖で鮮緑色を呈しており、富栄養化の程度は最悪時の霞ヶ浦を上回る。汚染がひどいので遊覧船で湖を回るのは中止する（写真4、写真5）。

滇池を見た後で99年の園芸万博のときに建設された「雲南民族村」へ行く。昆明滇池国家旅游度假区の経営で、入場料は70元だが、外国人でもパスポートを提示すれば70歳以上は無料。雲南省には、全中国55の少数民族のうち25民族が居住している。園内にはその中の16民族の村がつけられており、文化や風俗を紹介している。時間が限られていたので、このうちのタイ族村、蔵（チベット）族村、白族村、納西（ナシ）族村、彝（イ）族村、摩梭（モソウ）の村、を訪ねる。

観光客は村人と一緒に踊ることも、民族衣装の娘さんと写真撮影をすることもできる。白族の民家の造りがとくに美しい。将来は村の数を26まで増やす予定だという。園内は広く、各村を結ぶ有料の電気自動車も走っている。群衆のショーなどのアトラクションもあり、入園中の観光客の数は多い。近代化の遅れている地域では、観光は重要な産業である。雲南省では雲南省旅游条例が2005年5月27日に制定された（その翻訳を付録としてpp. 263-268に添付した）。一連の経過から判断して政府が、高速道路建設→昆明園芸万博→雲南民族村→雲南省旅游条例、と着々と観光開発計画を押し進めてきたことが分かる。中国政府の計画的には日本政府も見習うべき点が多い。昨年の山西省の調査で、農村の環境を守るには、農村をまず富ませる工夫が必要であることを学んだ。山西省と違って、水の豊かな雲南省にはそのための自然的条件が備わっている。夕食は山間霊香レストランで、松茸などのきのこのしゃぶしゃぶ料理、旬のきのこは美味しかったが、7人で470元は中国としては高すぎる。

8月13日(土) シーサンパンナ 景洪 銀通大廈 ★★★

本日から張秋英さん（李さんの奥さんで中国科学院大学院生）と蕭穎さん（張さんの大学院修士課程の同級生で河北師範大学講師）が参加。昆明



【写真6】観光客でにぎわう石林の中心部



【写真7】石林の中の静かな一風景



【写真8】小休止中の石林でゴミ拾いをするおばさん



【写真9】樹齢1700年の野生の茶樹の写真

を見学してから、夜の便で昆明から西双版纳(シーサンパンナ)タイ族自治州で最大の景洪市(人口7万)へ飛行機で移動。「州」は少数民族自治区に与えられる行政単位。

まず、昆明の東80kmの石林風景区を見学する。ここは1982年に国家重点風景名勝区に、また2001年に国家地質公園に指定された。面積は約400km²。海底で堆積した石灰岩が地上へ隆起し、その間に地震活動などで地層に亀裂が入ったため、もともと縦の割れ目の多い石灰岩が雨水による侵食作用を受けて、石の林のような特異な景観が生まれた。地質の専門家は1日いても見飽きるということがないだろう。週末でもあり、またガイドの歩くコースが決まっているためか、さわりの場所は動きがとれないほど混雑している(写真6)。しかし少しコースを外れると緑の多い景観が開けてのんびりできる(写真7)。園内には

100人以上の掃除人が働いており、捨てる後からゴミを拾うのできれいである。彼女らの月給は300円で、労働時間は朝6時半から夕方5時まで(写真8)。園内でのGPS測定値は、N24°49'25"、E103°19'26"、標高1760m。昼食は見物を終えてから近くの学成飯店で150元。

石林から昆明への帰路、きれいな陽宗海(海は湖の意)のほとりの七彩雲南という土産物商業コンプレックスへ寄る。このコンプレックスのお茶専門の百年茶荘で、展示してあった茶馬古道地図、普洱(プーアール)茶百票図、樹齢1700年の野生古茶樹の写真(写真9)などを見る。翡翠の専門店もあり、駐車場には楊麗萍の写真入で「天下翡翠出雲南 雲南翡翠第一家」の大きな看板。楊



【写真10】昆明市博物館の目玉である地藏寺経幢

さんに翡翠は良く似合う。次に訪れた昆明市博物館の目玉は、この場所で発掘された高さ6.2mの大理国后理国時代（1096～1253年）の地藏寺経幢で、全国重点文物保护单位。基部が8角、8層の石柱で、幢頂には如意珠が置かれている。側面の地に彫られた古代サンスクリット語の経文と精巧美しい菩薩像や広目天像などが目を引く（写真10、写真11）。説明を終えた館員が我われを連れていった2階は、高価な骨董品などの売り場になっていた。地方公務員が（資金集めと称して）商売をしている。雲南省は絹の産地でもあり、真綿布団などの高価な絹製品の店にも連れて行かれた。夕食後、飛行機で景洪市へ。景洪へ着いてから急に予定変更の連絡があり、明日会はずだったNGOの于曉剛博士と今夜会うことになる。瀾滄江のほとりにある茶店の風通しのいい2階で聞き取りを終えたのは真夜中の12時であった（写真12）。石林見物の疲れもあって全員疲労困憊。榎根は2002年の黄河シンポジウムの時に北京で于さんと言葉を交わしたことがあり、本年1月には環境研究会での講演を于さんに依頼したが、于さんの都合で実現しなかったという経緯がある。于さんの身分は法人である雲南大衆流域管理研究和推廣中心（Participatory Watershed Management and Promotion Center）のセンター長で、以下は于さんから聞き取った内容である。



【写真11】その地藏寺経幢の一部



【写真12】雲南大衆流域管理研究和推廣中心のセンター長、于曉剛博士（向こう側中心）から話を聞く一行

このセンターは、2002年には「綠色流域」という名称で登録されていた組織で、大衆参加を目指して現在名に変え、2004年に雲南社会科学院から独立した。目的は(1)研究、(2)交流（communication）と倡導（advocacy）、(3)実践の3つである。中国語の倡導とは「良い政策を提案すること」の意。

1.1 流域管理の比較研究：中、米、日の共同研究で流域管理の比較研究を行い、02年に英文と日本語で報告書を出した。

1.2 流域の法律に関する国際比較：流域管理に関係する法制面の比較研究を行い、考慮すべき

点を政府に提案した。WWFとも連絡を取っている。黄河の河川法についても研究した。

1.3 社会影響評価：水資源開発が及ぼす社会影響評価を、上流の3つのダムについて行った。ダム計画への住民参加と自然との調和が目的。開発による犠牲者は出すべきではない。2002年に報告書を作成し、プレス発表もした。政府とも協力しており、政府も10年以内には社会影響評価を行うようになると思われる。環境影響評価はすでに行っている。小規模のものとしては、シーサンパンナの地元の組織と協力して、灌漑システムの改善にも関係した。

2.1 メコン川情報センター：正しい情報を収集し、政府に提案することを目的に、メコン川委員会から資金を得てこのセンターを立ち上げた。メコン流域は6カ国にまたがっているが、ミャンマーは未参加で、現在5カ国に情報センターがある。03年には瀾滄江通信も出した。怒江と金沙江の情報も含めている。ホームページもあるが、情報発信は中国語のみ。先週、日本からボランティアの女性がメコンウォッチの仕事をするために来た。メコン川の評価システムを、10年以内に法律として完成させたい。

2.2 04年に北京で世界のダムについて討論会を開いた。先月は南開大学の社会政策シンポで研究発表した。最近では中国青年報、CCTV、中国環境報、人民報、光明日報などの協力も得られ、活動状況を報道してもらえるようになった。

3 実践活動：麗江の西方にある湿地(拉市海)について、02年からNGO、政府、市民の三者で委員会をスタートさせて話し合った。この湿地は、以前は省の自然保護区だったが、現在は国際ラムサール条約の湿地に格上げされている。01年に米国からの援助で開始し、4年間活動した。格上げされた結果、かえって色々な問題が生じてきて、三者の間に確執があったが、最近は三者の関係は良くなっている。確執の原因は、湿地をめぐる利益の衝突である。環境保全を巡って、ダム建設と

住宅や工業用の土地利用が対立した。ある問題について、私の報告と省政府の報告の結論が対立したこともあった。現在では雲南省は「湿地を保全すべし」との政策をとっている。

これまでの活動成果としては、この湿地を国際ラムサール条約に格上げしたことで、中国可持続事例の10例の1つとして表彰された。その他、中国環境保護局、中国科学院可持続発展研究所、アラサン生態賞などから多数の表彰を受けた。今後、政府の促進賞の受賞もねらっている。

8月14日(日) 景洪 銀通大廈

今日の訪問先は、中国科学院生態観測ネットワークの36地点の1つである Menglun の中国科学院西双版纳熱帯植物園。東へ進み長さ約500mの瀾滄江大橋を渡る。雨季(5月~10月)であるため流量が多く、水は黄河のように濁っている。昨年からの森林伐採は禁止されたというが、依然として流域からの土壌流出が著しい証拠である。年降水量は1200~1900mm。途中、瀾滄江の支流で車を止めて対岸の土地利用を観察する。レイシ、ゴム、トウモロコシなどが雑然と耕作されており竹も多い。レイシは4年、ゴムは8年で収穫できる。ゴムの寿命は28年。ガイドの説明によると、60年代に上海などの下放青年がゴムの栽培を始め、アイニ族がそれを真似てゴム林が広がった。ゴムは根が浅く、樹液の採取・採集を容易にするために除草剤を撒いて林床の下生えを除去するので(写真13)、土壌が侵食されやすい。パイナップル畑でも土壌が露出している(写真14)。途中の道端には植物園へ来る観光バスの客を当てにした果物の露店がいくつかあり、ココヤシ、パイナップル、マンゴー、バナナなどを売っている。昆明から200km以上はなれた中国科学院西双版纳熱帯植物園で、森林生態研究中心の副研究員で気象・森林水文が専門の劉文杰博士から以下の話しを聞く。



【写真13】 下生えの生えていない土壌侵食されやすいゴム林

ここは50年代から熱帯植物研究所だった。80年代に一部が国に移管されたが、2年後に返還され昆明の生態研究所になった。現在は研究所と同格の植物園として独立している。来年から国の施設になる。目的は植物と生態の研究、植物の保全と利用、および実例による生態学の教育を一般人にすることで、最後の目的が最も重要である。面積は900ha余りあり、スタッフは200人。そのうち研究者は70~80人で、その3分の1が教育、3分の1が開発に従事している。他にパートタイムの園内ガイドが300人いる。当地方は地形の関係で北からの寒気の流出が妨げられているので、ぎりぎり熱帯に入る。共産党支配以前は熱帯雨林だった。共産党支配以後、60年代に毛沢東の故郷である湖南省から1県が移住してきて、2人のタイ人からゴム栽培の技術を学び、ブラジルからも苗木や育種技術を移転して、熱帯雨林が急速にゴム林に変わった。毛沢東思想は開発中心主義で、まだ自然保護の考えはなかった。当時は少数民族が焼畑を行っていた。その時点でもすでに熱帯雨林は3箇所でも20~30km²しかなかったが、二次林はもっとある。中央政府は90年代に焼畑を禁止した。森に生育している大型野生動物は象、虎、熊、猪などで、象は保護区にいる。3毛作が可能だが、1作で食糧は十分確保できるので、兼業農家が多い。シーサンパンナには雲南省に住む少数民族のうちの13民族が居住する。人口1万人ほどのジ



【写真14】 土壌侵食されやすい赤土が剥き出しのパイナップル畑

ヌ族は、タイ族が怖いのか平地には降りてこない。この地区の生活レベルはシーサンパンナの平均よりも少し上で、植物園の周辺に限定すれば最高レベルにある。農業は昨年から無税になった。女性の月収は400~500元である。大企業はない。ゴム林は退耕還林の対象にはなっておらず、収益性が高いので、依然として増加している。環境保全よりも経済優先の考えが強い。本園が教育を重視するのは政府の方針で、環境保全意識の向上と、現状を認識させた上での経済発展を目指している。中国では学校教育が中心で、家庭教育の比重は低い。本園へは年間に300~400万人の訪問者があり、入場料は60元。数年前だが年間に1000万元の収入があった。

植物園は、N24°49'42"、E103°29'45"、標高596m。園内の展示館内に、No forest no water. No water no paddy fields. No paddy field no food. No food we can not live. と大きく中国語と英語で書かれていた。水が全ての源であることを表す、文句のつけようのない因果律である。水に恵まれた雲南省は森と水から環境改善を始めることができるが、昨年訪れた水の少ない山西省ではどこから始めたらいいのか。出口に掲げてあった結語(Conclusion)のパネルは中国語、タイ語、英語の3ヶ国語で書かれており、タイ族自治区であることを改めて認識する。園内で印象深かったのは



【写真15】 植物園内で絞め殺されつつある熱帯雨林の木



【写真16】 絞め殺されて倒れてしまった木



【写真17】 中国科学院西双版纳熱帯植物園で劉文杰博士から話しを聞く（向かい側正面）



【写真18】 神秘愛尼古寨の入口



【写真19】 高床式のタイ族の農家



【写真20】 タイ族の農家の裏庭にあった天然浄化池

「絞殺現象」で、これは大きな木に榕樹などの細い木がからみつき大樹を殺してしまう熱帯雨林の重要な特性の1つである（写真15、写真16）。園内を見物してから昼食をご馳走になった。その時だされたパッションフルーツのジュースは美味（写真17）。中国農業産業化国家重点花頭企業の

製造で、紙パックはドイツの技術である。帰路「神秘愛尼古寨」の看板につられて（写真18）、入場料100元をはらって、少数民族の「野外天然見世物」を見る。熱帯雨林の中で、伝統的な機織り、樹屋鳥人、食生血人、鉄漿人、巨大耳朶穴人、大蛇ショー、首長族婦人、火つかみ、タイ族の踊り、

太鼓踊りなどが行われている。駐車場に「保護森林 愛護環境」の看板。ここは彼らが住んでいた森なのか？ 外部資本に頼らずに自力で経営しているのか？ などの疑問が湧いてくる。見物人はあまり多くはなく、見物後の後味は、いわく複雑。宋さんの「これでは人間の動物園みたいなものでしょう」という言葉に、少数民族の人権や自治とは何かを深く考えさせられる。その後で、比較的裕福なタイ人の民家の中を見せてもらう。タイ人の女性は働き者で、この家は観光コースに入っているらしく、説明を終えてから金銀細工などの土産物を広げて我われに売りつける。家は高床式で(写真19)、1階では豚や鶏を飼っている。農家の裏庭に昔の日本の農家にもあった家庭雑排水をためる池、つまり天然の浄化槽を見つけた(写真20)。天然の浄化能力に依存できる間は、環境問題はまだ顕在化していない。

8月15日(月) 景洪 銀通大廈

少し時間に余裕ができて、これまでは8時～8時半の出発だったが、今朝は初めて9時出発になった。シーサンパンナで見かけた果物や花は、パイナップル、ザボン、マンゴー、ココヤシ、バナナ、パッションフルーツ、マンゴスチン、パンの実、ブーゲンビリア、ポインセチア、プルメリアなどで、東南アジアの熱帯で見かけるものと全く同じである。ただしパパイヤだけはまだ見てい



【写真21】 西双版纳野象谷景区のリフトから眺めた熱帯雨林

ない。標高が低いいためか茶畑もほとんど見かけなかった。景洪の北50kmに広がる自然保護区の端にある、野生の象が300頭生息する Mengyang の西双版纳野象谷景区へ行く。1988年に自然保護区に指定されたとき観光用に整備され、宿泊施設も造られた。園内ではリフトに乗って熱帯雨林の観察ができ(写真21)、遊歩道の散策も楽しめる(写真22)。原始林を対象にしたエコツーリズムとしては大胆な発想による開発である。残念ながら野生象には出会えなかった。園内では豹狩りショー、蛇神ショー、少数民族の踊りなども見ることができ、多数の象によるショーもある。1頭の象が、逆立ちをしている最中にお尻の穴を観客に向けて大きな糞を放出した。調教師が仕込んだ技だとすると下品にすぎる。観客席の幕には「エメラルドグリーン雨林に身を置くと、心は野生象とともに行く」という美しい言葉が掲げてあったけれども(写真23)。昼食は野菜料理で、セロリ、キュウリの葉、カボチャの葉、ヘチマの葉、セリ、ワラビ、竹の子、トウガン、チンゲンサイ、ナスが炒め物として10皿並んだ(写真24)。それにトマトと卵のスープを加えて、9人で113元。

雲南といえば普洱(プーアール)茶である。景洪へ戻ってから、世界最大の茶餅の飾ってある豊源茶芸で(写真25)、主人からプーアール茶の話や淹れ方を教わる(写真26)。雲南のお茶は標高1000～2800mの赤土の酸性土壌で育ち、茶葉が大



【写真22】 西双版纳野象谷景区にある空中遊歩道



【写真23】象のショーの観客席、横幕の文字に注意



【写真24】雲南省ではヘルシーな野菜中心の料理が主体



【写真25】茶店に飾ってあった世界最大といわれる茶餅



【写真26】プーアール茶の茶道のデモンストレーションをしてくれる店主

きいのが特徴である。1回に用いるプーアール茶は3グラム以下で、熱湯を用い、最初に茶葉を1〜2回洗淨して流す。小さな茶碗を用いて、お茶で何回も茶碗を洗って、器のおいを洗い流してから茶を淹れ、ゆっくり香りと味を賞味しながら楽しむ。お茶請けに甘い茶菓子を添えることもある。緑茶や紅茶と違って、1回の茶葉で20回近くも淹れることができる。最近では日本でもダイエットブームでプーアール茶の人気が高まっているが、コーヒーや紅茶のようにがぶがぶ飲むものではないようである。プーアール茶には自然発酵の生茶と人工発酵の熟茶があるが、いずれをよしとするかは人の好みによる。漢方では夏は涼で龍井茶などの緑茶を、冬は温を好みプーアール茶をよしとする。プーアールの語源には地名説と民族名説の2つがある。夕食はタイ料理で130元。

8月16日(火) 大理 泛美酒店 ★★★

今日は西双版纳原始森林公園を訪ねてから、夕食後遅い飛行機（熱帯では日中は積乱雲でフライトが不安定になるので）で大理へ飛び、大理の泛美酒店という開業したばかりの新しいホテルに泊まる。開業直後でもホテルは満室だった。

夜のフライトまでの時間を利用して、観光業の視察に向かった。西双版纳原始森林公園は瀾滄江を渡って景洪から東へ8 km 行った所の原始林を利用して造られている。1999年の昆明園芸万博のとき、浙江省の企業人が政府からこの原始林の使用権を買ってエコツーリズム企業を起こした。原始林の中には小1時間歩くことのできる（竹を編んだ一部空中の）遊歩道がある（写真27）。遊歩道の一番奥には射的場まである。森はかなり荒れているように見えた（写真28）。溪流水の測定



【写真27】 西双版纳原始森林公園の竹を編んだ空中遊歩道



【写真28】 西双版纳原始森林公園の少しあれた森

値は、EC：480、pH：8.32、気温26.3℃、水温22.3℃、N22°01'90"、E100°52'51"、標高739mで、予想した通りひどく汚れていた。この値では原始林の溪流とはとてもいえない。この公園内には、原始林の外でアイニ族の村を再現した場所での娘さんたちとの「試婚」遊びや、動物を使ったショーも行われている。動物ショーの前には有料だが10円でアイニ娘のマッサージも受けられる。入園料は50円で、園内には有料の電気自動車が走っている。森の中では散策中の写真がいつのまにか撮られており、20元払えばパソコンで直ちに印刷してくれる。昨日の野象谷景区と同様に、原始林の内部での大胆すぎる観光開発方式と、隙間産業をぎっしり詰め込んだ過剰な商業主義には驚くばかりである。帰りに瀾滄江の右岸、景洪港の対岸あたりで水質を測定すると、EC：260、pH：7.93、水温22.6℃、N22°00'55"、E100°48'04"、標高536mで、原始林の水よりもはるかに汚染の程度は少なかった。

8月17日(水) 大理 泛美酒店 ★★★

このホテルには、コンドームの他に性交時に使うのであろう「抗菌洗液」が男士専用・女士専用、各10円で備え付けてある。満員の客と関係があるかもしれない。大理市は大理白族自治州（大理市+12県）の州都で洱海（耳の形をした湖）とその周辺を巡る観光の拠点である。私たちのガイ

ドさんは白族と漢族の混血で美人である（写真29）。彼女の基本給は月300円で、1回のガイドで10元が加算され、観光土産店からのバックも入る。彼女が被る帽子の白は雪、黒は月、色とりどりの玉は花を、また垂れ下がった白い房は風を表す。「風花雪月」は白族文化の象徴である。結婚すると垂れ下がった白い房を短く切る。白族は120万人おり、文字を持たず、漢字を入れた。洱海に浮かぶ5隻の大型船は80年代後半から導入され、1999年から5階建ての高速新鋭船も運航を始めた（写真30）。船上からは「洱海保清」のために、ゴミや藻を拾い上げている小船が見える。「洱海を滇池にするな」が合言葉らしい。船内ではマージャン、カラオケ、マッサージ、飲食ができ、白族舞踊を鑑賞しながらの三道茶のサービスもある（写真31）。白族は三道茶をふるまってお



【写真29】 白族の帽子をかぶった美人のガイドさん



【写真30】 洱海で観光客を運ぶ新鋭の大型船



【写真31】 船内で行われる三道茶のサービス



【写真32】 洱海の小島に立てられた大きな白大理石の観音像



【写真33】 白大理石の観音像の大きな台座

客をもてなす。一道茶は「苦」、二道茶はナッツと砂糖が入っていて「甜」、三道茶は薄荷入りで「回味」で、異なる味のお茶を一度に3回賞味する。

大型船で最初に連れて行かれたのは、大理州政府が1999年に建立した大きな白大理石の観音像が立つ小島である（写真32、写真33）。白族には本主文化信仰があり、仏教や道教や儒教も信仰する。この小島には色々な石造りの大型神像が立っていた。途中から陸路に移り、昼食は白族経営のレストランで高原野菜料理。この家は商売上手で、絞りの藍染工房や土産物屋も経営している（写真34）。白族は白を好み、民家の瓦屋根も美しい（写真35）。このレストランの近くに「優質石綿瓦」



【写真34】 絞り藍染工房の染色場

の看板を見つける（写真36）。山中で石綿瓦を焼いているのを後日見た。日本ではいま石綿の発癌作用で大騒ぎである。環境問題の原因は気づかぬところにある。次に訪ねたのが胡蝶泉（写真37、写真38）。泉の水は透明だが、EC：282、pH：7.82、N25°54'38"、E100°05'41"、標高2025mで、水は



【写真35】白族の集落



【写真36】石綿瓦の看板



【写真37】胡蝶泉の湧源



【写真38】胡蝶泉に集まった観光客



【写真39】崇聖寺の三塔



【写真40】「風花雪月」模様の天然大理石の飾りもの

期待したほどきれいではなかった。春に多種類の蝶が乱舞するのでこの名があり、王様に恋人を召し上げられた青年がこの池に身を投げた悲恋物語

も語りつがれている。その次が有名な崇聖寺の三塔(写真39)。中央の仏塔は高さ69m、16層の方形レンガ造りで、836年の創建である。両側の2塔は1923年の雲南大地震で8°ほど内側に傾いた。大理は大理石の語源になったところで、大理石の加工・販売所にも寄る(写真40)。「風花雪月」



【写真41】大理古城の新しく造られた水景街



【写真42】大理古城の古い街並み

を表す模様天然の大理石が飾りものとして売られている。最後に訪れたのは大理古城（古城は旧市街の意）で、紅龍井から入り、周辺の山からの川水を引いて2000年に造ったという水景街を通して（写真41）、南門へ抜ける。水路の水は、EC：108、pH：8.96できれい。大理古城は1996年の地震で大きな被害を受けた後に再建されたもので、街の景観から受ける全体的な印象は「新しい」。水景街は面白い工夫だが歴史の重みに欠ける。しかし注意してみると白壁の崩れた1930年代の古い建物も少しは残っている（写真42）。この地震の被害で大理古城は世界文化遺産の申請をあきらめた。昆明園芸万博が大型観光開発のきっかけとなり、昆明とは高速道路で5時間の近さになったが、大理—麗江道路が開通してからは大理に泊まる観光客が減少したという。しかし我われの目には結構賑わっているように見えた。夕食では泥鰌汁、薬用山人参のから揚げ、きのこ料理などを食べる。

今日一日を振り返ってみると、大理の主要な観光資源は洱海、胡蝶泉、崇聖寺、大理古城の4つであり、新たにつくられた観音像の小島なども伝統文化を生かしている。自然と文化を活用してシステム化されたこの観光コースへ、5隻の大型観光船の客が毎日大量に送りこまれてくる。まさしく10年あまりの短期間で構築された一大観光産業である。エコツーリズムという言葉があるが、

この分野の学問的研究が遅れてはいまいか。

8月18日(休) 麗江 僑鑫大酒店 ★★★

マイクロバスで大理から麗江までは山を1つ越えるので約4時間かかる。途中で見たタバコ畑、桑畑、ヒマワリ畑、水田、大理石の採石場、松林などが印象に残った。この地域の松林は、封山育林のために飛行機から種を撒いたもので樹齢はまだ若い。麗江に近づくと瓦屋根2階建ての農家が多数新築中で、この地方の経済活動の活発さがうかがわれる。麗江納西族自治州市の州都の中心であった麗江古城（旧市街）は、ナシ族が中心になってつくり上げた街で、今日のガイドさんはナシ族



【写真43】ナシ族の美人のガイドさん

の美人である。白族とは違って、ナシ族では色が黒くて太った人が美人とされる（写真43）。大理古城と同じく麗江古城も1996年の大地震の被害を受けたが、1997年に世界文化遺産に登録された（写真44）。被害の程度に差があったのかも知れないが、我われが予備知識なしに公平に比較しても、大理古城よりは麗江古城のほうが観光資源としてははるかに優れている。昼食はこの古城のレストランでナシ族料理、160元。ナシ族は西藏仏教、道教、儒学と土着の東巴（トンパ）教が混交した特殊な宗教を信じている。トンパ文字で書かれたトンパ経（百科全書）には、人類と“署（大自然）”は同じ父親をもつ異母兄弟であると書かれており、人間のほどほどの自然利用は容認されるが、貪欲な自然利用は禁じられている。このような厳しい倫理的伝統のおかげで麗江地域の美しい自然が保持されてきたと、トンパ経は伝えてい

る。「トンパ古籍文献」は2003年に世界記憶遺産に登録された。同じ2003年に、金沙江（長江の上流）、瀾滄江（メコン川の上流）、怒江（サルウィン川の上流）の三大河川が並行して流れて深い峡谷を刻む、面積1.7万 km²のこの地域一帯が「三江並流」として世界自然遺産に登録された。麗江古城、三江並流、トンパ古籍文献の3つをあわせて「三遺産」という。

麗江は南方シルクロードと茶馬古道（写真45）の要衝地として栄えた街で、中心にある四方街の広場へは、昔は7つの街道から人が集まり、そして散って行った。密集する2階建ての木造家屋の間を網の目状に石畳の細い小路が延びている。近くの山から流れ出す川水はまず黒龍潭という池に貯められ、街の北端に位置する水車のある場所で分水堰によって東河、中河（玉水河）、西河の3つの流れに分けられてから街中を貫流する（写真



【写真44】麗江古城入口の水車



【写真45】麗江古城に残る茶馬古道



【写真46】麗江古城入口の分水堰



【写真47】麗江古城の西河に沿う柳と石畳

46)。中河が自然の河川であり、西河は元代、東河は清代に掘削された。石壘と柳と水路と橋が独特の景観を生みだすこの街に住むナシ族にとっては（写真47）、公共の水を守ることは自分の眼を守ることと同じだという言い伝えがあり、水の利用法には厳しい社会的な定めがある。例えば湧水の利用は「一井三潭」方式で上流から下流へ3つに分けられた潭（または眼）の並ぶ三眼井で行われるが、最初の潭は飲用、2番目の潭は野菜洗い、3番目の潭は洗濯と用途が決められている。古城には三眼井が7ヶ所ある。四方街の広場では、昔は輪番制で毎日、標高の高い西河を堰き止めて水を水路から溢れさせ、この広場にたまったゴミを東河へ流し込み、それを中河の下流ですくい上げて肥料にした。現在でも月に3回くらいは行っているらしい。この古城には、大理古城のような計画された城市とは異なり城壁がなく、道路も直行してはいない。水の流れの機能を活用し、古い街道沿いに自然のままに発達してきたこの街の各所から、住民の生活の知恵の凝縮を見ることができる。ポストモダン風に表現すれば、麗江古城は、社会関係資本の豊かなエコロジカルな地域社会の典型である。

この古城の一画にあるナシ族の民家に米国大自然保護協会（The Nature Conservancy）中国部事務所が置かれているが、まことに地の利を得た立地である。事務所の一部では中国の保護すべき自然



【写真48】麗江周辺部に建設中の別荘群

に関する写真展示も行われている。この事務所で貰ったパンフレットによると、The Nature Conservancyのスローガンは“Save the Last Great Places”であり、その中国語訳として「保護地球上最後の浄土」と印刷してある。Great Placeを「浄土」と訳した人に敬意を表したい。この麗江古城で店を1軒構えるには10万円の資本投下が必要で、最近漢族による外部資金の店も多くなった。観光客にとってこの古城には都市景観以外にも、トンパ文字、トンパ紙、古楽器、工芸品、手工業、茶店、飲食店、バーなどの楽しみがいっぱいある。

8月19日(金) 麗江 僑鑫大酒店

今日の目的地は麗江の北15kmに位置する標高5596mの玉龍雪山である。ナシ族にとっての玉龍雪山は、日本人にとっての富士山に相当する霊山で、麗江の絵葉書の背景には欠かすことができない。しかし雲の中に隠れていて、残念ながら我われは見るができなかった。玉龍雪山は赤道から最も近くにある氷河の懸かった山で、未踏峰だが、標高3240mの雲杉坪（坪は平らな場所の意）まではリフトで登ることができる。別に4500m付近まで登るリフトも最近完成したという。

麗江市街の周辺部では別荘群の建設中だった（写真48）。1戸40～50万円で、麗江以外に住む雲南省のお金持ちが購入し、一年中冷暖房なしでも過ごせるこの標高2400mの高原都市で週末を



【写真49】山火事で下半分が焼けた松林



【写真50】薄青色で透明な白水河の小さなダム湖の水



【写真51】リフトの乗り場前で売られていた毛皮



【写真52】標高3200mの雲杉の天然林



【写真53】雲に隠れて見えない雲杉坪から見た玉龍雪山

過ごす。飛行機から種撒きをして育てた松の下半分が焼け焦げていたが（写真49）、原因は接触放電による山火事だという。この高度では松が育つが、3200～3700mの高度帯では自然植生は雲杉に変わる。白水河の小さなダム湖の水は薄青色で透明。この美しすぎるほどの青さには（写真50）、光の反射に関する微量な溶存成分が関係しているのではないかと思われる。リフトの乗り場はここからすぐ先にあるのに、車は渋滞して前へは進めない。ほとんどの人がバスを利用して団体旅行する現在でもこの状態だから、マイカー時代が到来したら道路は機能不全になることだろう。観光開発の将来にも多くの問題がある。

リフト乗り場前の駐車場には露店がいっぱい出っていて、密猟したものかどうかは判断できないが、豹や虎の毛皮も売られている（写真51）。1頭丸焼きの羊は瞬く間に切り売りされて骨だけになっ

た。ほかに高地でとれる漢方薬、いろんな食べ物、防寒衣類などが雑然と並べられている。3時間近くも行列に並んでようやくリフトに乗ることができたが、屋内で行列待ちをしている場所でも、一杯10元の人参茶売りや、客の苗字をトンパ文字で書いてくれる色紙売りなど、様々な隙間産業で人々が働いている。リフトを降りてから「麗江天然林保護工程重点林区」の看板を目にした。この写真（写真52）に写っているのが天然保護林の雲杉だと思われる。高度が高くなったのでセーターが必要になった。林の中をしぼらく歩くと雲杉坪に出るが、雨季である夏場に玉龍雪山が頂上まで姿を見せることはめったにない（写真53）。



【写真54】雲杉坪の高地草原にあった穴



【写真55】民族衣装を着て観光客が来るのを待つ雲杉坪のイ族



【写真56】観光客相手にパソコンで合成写真をつくる若者

雲杉坪は天然の草原で雲杉は生えない。草原の中に穴を見つける（写真54）。この穴が発達すればドリーネになるだろう。基盤が石灰岩からなるこの場所は、白水河と黒水河に挟まれた鞍部地形になっていて土壌が発達しにくいので、樹木が育たずこのような天然の草原になったのであろう。この草原を一周する板敷きの歩道にはイ族の人たちが民族衣装を持参して観光客が来るのを待ち構えている（写真55）。20元だと民族衣装を着た写真を撮ってくれる。30元だとパソコンのデジタル写真合成技術で人物の背景に（雲の中に隠れて今は見えない）玉龍雪山を挿入してくれる（写真56）。電源は自家発電である。少数民族、漢族を問わず、商売（金銭）に対する民衆の熱気はものすごいものだ。環境保護は人間の欲望との戦いでもある。高山病に備えて李さんが小型の酸素ボ

ンベを用意してくれたが、全員そのお世話にはならず済んだ。リフトで山を下りて白水河のダムそばで遅い昼食。料理の値段はヤク牛の肉が最も高く一皿50元。帰路ゴルフ場の中にある甘海子という池で水質を測定する。EC：121、pH：8.97、水温17.6℃、N27°06'33"、E100°15'11"、標高3028m、水は汚染されていない。周辺の高原牧場には色とりどりの高山植物が咲き乱れていてとても美しいが、我われ以外に眺めている人はいない。ガイドの説明によると、ゴルフ場の所有者は返還直後の初代香港長官董氏の夫人で、ゴルフ場の客は主に香港から遊びにやってくる。ゴルフ客のための別荘風の宿舍が遠望されるのどかな高原風景ではあるが、その背後には、自然資源を誰が最初に観光資源化する権利を得るかという開発利権の問題が隠されている。環境と観光を経済の問題としてのみ捉えると、権力機構の役割を見落とすことになる。

夕食後ライトアップされた麗江古城を散策する。ナシ族のお盆だとかで、水路で燈籠流しが行われている。流す燈籠は1個10円で売っている。このトンパ文化の満ち溢れるすばらしい古城で、蕭さんがポケットに入れておいた携帯電話を掏られた。早速警察に届けておいたら、その日のうちに犯人がつかまり、携帯電話は無事にもどった。警察官が有能すぎるのか、犯人がのろまずすぎるのか、それとも地域共同体の機能が立派に働いてい

るからか。速やかな犯人逮捕の理由は旅行者には分からない。我われのホテルは新市街の50m道路沿いにあり、この道路の両側には新しく建てられたホテルや旅行業者のビルが殺風景に並んでいる。古城あつての麗江である。ホテルから古城までは歩いて行ける距離だが、帰りは疲れたので6人乗りバンの白タクに乗り、新市街を一巡してくれと頼んだら、少数民族の風俗店へ横づけされた。宋さんの「No!」の一言で無事開放されたが、観光とセックス産業の関係をここでも再確認することになった。大理と麗江の観光では、「自然—文化—環境—観光—経済—社会的基盤—権力機構」の関係について考えさせられることがあまりにも多かったが、雲南省の観光産業が「多様性」に大きく依存していることは間違いない。自然の多様性が文化の多様性を生み、その多様性をもつ地域が、中国という国家が豊かになるにつれて観光資源としての価値を増しつつある。昨年の夏以来の、なぜ雲南省で多様性に関する学術誌が多数発行されているのかという疑問は、今回の調査で解けた。これから雲南省政府は、観光産業で人々を富ませながら環境をいかにして守っていくかという、難しい問題と取り組まなければならない。

8月20日(土) 麗江市 瀘沽湖(落水村) 民居

今日は麗江の北約200kmにある瀘沽湖を訪ねて湖畔の落水村で民宿する。この湖一帯を中心に、母系家族の摩梭(Mosuo)人が居住している。摩梭人は文字を持っていないが独自の言語を話す。中国政府は、人口2万とも4万ともいわれるこの摩梭人はナシ族系の少数民族であるとし、摩梭族とは認定していないが、摩梭人自身は独自の文化と伝統を保持する1つの少数民族だと主張している。「族」に認定すると、補助金や自治権などの問題が新たに生じるので、中央政府は族を増やすことに積極的ではないらしい。中国人でもこれまで訪ねることの難しかった「秘境」に住むこの特異な風俗をもつ摩梭人を訪ねることが、蕭さんた



【写真57】はげ山が多い山腹

ちがこの調査旅行に一部参加した主な理由だったと思われる。麗江市の総面積は2.1万 km²で日本のどの県よりも広いが、平地は少なく、四川省との州境に位置する瀘沽湖へ行くには山を6つも越えなくてはならない。道路の一部は犬の頭大の石を敷き詰めたガタガタゆるる「狗頭路」である。山腹ははげ山の部分が多く(写真57)、急斜面に刻み付けられた道路には土砂崩落の危険箇所が多数ある。しかし幸いにも豪雨に襲われることはなく、無事目的を果たすことができた。

摩梭人についての予備知識を最初に少しだけ述べる。摩梭人はかつての遊牧民で、瀘沽湖周辺で定耕定牧するようになった。瀘沽湖は南へ流れ出す川を持つ馬蹄形をしたコバルトブルーの湖で、面積約50km²、最大水深は93mである。成因については、南北に走る断層の活動に伴う陥没で形成されたとする記述もあるが、火山活動の可能性も否定はできない。近くには温泉の湧く「温泉」という名前の部落もある。湖岸の草海は小魚が豊富で、多数の野鳥が訪れる。豊かな自然に恵まれ、外界とは隔離された、この風光明媚な土地で摩梭人の新たな生活が始まったことが、彼らの特異な文化形成に強く影響したと考えられる。摩梭人は達巴教という土着宗教と西藏仏教の両方を信仰し、自分たちは女神の子孫だと信じている。摩梭人にとって女性とは生命の源であり、知恵と勤勉



【写真58】 瀘沽湖湖畔で幼児のお守りをする「おじさん」

の権化である。それゆえ彼らは母親を深く愛する。この美しく神秘的な土地で女性たちは、湖の北にそびえる3775mの格姆女神山と、母親湖とたたえる瀘沽湖を心の糧にして、いわゆる「地上の楽園」（文献によっては「エデンの園」と表現している）をつくりあげた。摩梭人社会の最大の特徴は母系大家族制で、家を継ぐ権利は女性にしかない。男は娶らず、女は嫁がない。男女共に13歳になると春節に成人式を祝ってもらい、自由を得る。女性は同居寝室から離れ、男性を受け入れるための一室（花房または花楼）が与えられる。ただし男性は粗末に扱われる。花房へは家人でもむやみに入ってはならず、そこへ夜になると馬に乗った男阿夏が通う「走婚」（visiting marriage）または「阿夏婚」が現在も行われている。阿夏は恋人を意味する。阿夏同士は、最初はために密かに愛し合うが、親密な関係になると男阿夏が女阿夏に金、銀、玉、首飾りなどを贈り、両者の関係が周囲の人に公式に認められる。子供が生まれてお披露目の会を済ませると、男阿夏は自分の子供を訪ねることができるようになるが、子供と一緒に住むことは許されない。生まれた子供は実母と「おじさん」つまり実家に同居している女阿夏の男兄弟が育てる（写真58）。したがって摩梭人には「父」という言葉がない。阿夏婚では経済的な結びつきが弱いので、その関係はこわれやすい。このことが一妻多夫だと誤解されやすい一因であ



【写真59】 屈曲を繰り返す坂道と遠方の谷あいに見える金沙江

ろう。一家の主の座には長女または資質に恵まれた年長の女性が座り、全財産は女主から娘へと受け継がれていく。ただし最近ではこの婚姻形式にも変化が見られるようになったといわれている。

1泊するのに必要なものだけを持ち、それ以外の荷物はホテルに残して、瀘沽湖を目指して出発する。山あいには散在する白族やナシ族の集落を見ながら山道を小1時間ほど走り、最初の峠を越えると麗寧十八湾という標識の立つイロハ坂に出る（写真59）。はるか彼方に金沙江が見える。山には木はほとんど生えていない。近くの溪流の水を測定すると、EC：338、pH：8.55、水温16.5℃、N26°58'48"、E100°24'48"、標高1954mで、渓流水にしては導電率が高い。山が荒れているからであろう。金沙江の本流まで一気に500mほど下ってから測定した値は、EC：445、pH：8.27、水温18.8℃、N27°00'00"、E100°26'11"、標高1419mであった。金沙江の段丘上にある阿英飯店というレストランではバイオガスの施設を建設中だった。写真のように（写真60、写真61）、コンクリート製の槽を2つ繋げたもので、便所から太い塩ビ管を通して落ちてくるであろう糞尿を最初の槽に貯めて発酵させ、写真（写真62）で男性の左足の先に突き出ている細い管からメタンガスを取り出す。写真60では男性が立っている槽の上面に大きな穴が開いているが、この穴は工事用の穴で、



【写真60】 建設中のバイオガス発生施設



【写真62】 つま先の先に見えるメタンガスを取り出すための細い管



【写真61】 金沙江側から見上げた建設中のバイオガス発生施設



【写真63】 急斜面の山腹を彫りこんで造られた道路



【写真64】 かなり荒れているように見える植生の少ない山

工事が終われば閉じてしまう。その右にある2番目の槽は腐敗しきらなかった残渣を取り出すための穴で、取り出した残渣は肥料として使う。建設費用は一施設2000円で、必要な資材を政府から支給され、労働は自前で行っている。金沙江を渡ると道は支谷へ入り再び登りになる。道路建設が自然破壊の第一歩であることはどの国でも同じである（写真63）。山はかなり荒れている（写真64）。道路をふさぐ羊の群れやロバと出会う。植生の少し回復している斜面もある。尾根筋を縫って走る。料金5角を徴収する公衆便所の脇にはイ族の10歳の男子がいて金を集めていた（写真

65）。この便所と同様に、イ族の民家や小屋はログハウスであり、山の木が建築材としても伐採されたことがわかる。これまでも道路沿いには所々に公衆便所があり、料金が2角のところもあった。倉庫のレンガ壁に「社会要発展、民族要進歩、婦



【写真65】道路脇のログハウスの公衆便所



【写真66】還林に成功した山



【写真67】麗江瀘沽湖景区門票站的看板



【写真68】櫓をこぐ神秘的でも「たくましい」摩梭婦人

女要開放、文盲要掃除！」の宣伝文を見る。発展とは何か？ 進歩とは何か？ 開放とは何か？ という問いを含めて、中国の農村の抱える問題は多い。紅旗村玉福園で昼食、12皿で143元。マツの植林に成功した斜面も見た（写真66）。雲南省ではほとんどの植林が成功しているそうだから、今後の努力次第では山に緑が戻ることだろう。

湖盆へ下る峠付近に瀘沽湖景区門票站があり観光料金1人78元を徴収される。ただし70歳以上は無料。ここは省レベルの観光地で、制度化されたのは2004年と新しく（写真67）、本格的な観光開発はこれからである。瀘沽湖岸に出ると「保護母親湖 保護我們共同的家園」の大きな看板が目につき、ここでは共同体の思想がまだ生きることがうかがわれる。岸边には観光客相手の木製の船がたくさん浮かんでいる。その中で一番大型の10人乗りの船を雇い、5つある島のなかで最

も美しいといわれる里務比島へ向かう。漕ぎ手は3人だが、2人の若い男子が舳先と櫓の櫓を操り、最もエネルギーを使う中央の漕ぎ手は壮年の女性である（写真68）。神秘的といわれる摩梭人の女性の「たくましさ」をまず見せ付けられた。この島には1981年建立のラマ寺があり、お堂の中には正面中央に釈迦牟尼、その反対側には格姆女神が祀られている。側面には西藏仏教特有の男女合体尊像も描かれていたが、写真撮影は許されなかった。陸に戻って摩梭人の民家を訪ねる。説明は今年北京の大学に進んだばかりのこの家の若者がしてくれた。彼は民俗学を専攻したいらしい。この家は15人家族で、5人の男性は外で働いており、家にいる10人のうち6人が女性である。家の門をくぐると中央に大きな広場があり（写真69）、広場を囲んでコの字型に家屋が建ててある。右手にある母屋の正面左隅の棚に豚が4匹干して



【写真69】摩梭人の家屋中央の広場



【写真70】風通しのいい場所で風干中の猪膘肉

【写真71】摩梭人の居間、一段高いベッドが
女主のやすむところ

【写真72】囲炉裏の正面に祀られている神様

ある（写真70）。この「猪膘肉」は富の象徴でもあり、成人式のとき男子は居間の男柱の下、女子は女柱の下で、片足を猪膘肉の上に、もう一方の足を穀類をつめた袋の上に載せて立ち、お祝いをしてもらう。猪膘肉を作るには、まず豚の毛をとり、腹を割いて、頭以外の骨と内臓を取り除き、強い酒で中を洗ってから、食塩や香料を詰めて腹を閉じ、そして風干させる。5年くらいで食べられるようになり、それ以上風干させれば生食も可能で、美味である。この母屋はログハウスで築90年。家を建てるときは、木材は自分で買うが、工事は職人が行う。釘は使わない。皆が集まる大きな居間には一本の木からとった太い柱が2本立っている。正面に向かって左側にあるのが女柱（祖母）で根に近い下半分を、右側が男柱（叔父）で同じ木の上半分を使う。囲炉裏を挟んで女性は

向かって左側、男性は右側に座り、家族一緒に食事をする。左側の奥に一段高いベッドがあり、ここで女主の老祖母がやすむ。見るからに女主の尊厳が感じられる造りである（写真71）。このベッドの下にはたくさんの引き出しがあり、その中に金銀宝石類がしまっている。囲炉裏の真上は燻製所で、居間の梁には燻した豚の頭や鶏など様々なものがぶら下がっている。トウモロコシの穂が干してあるのは、高い湿気による発芽を防ぐためである。囲炉裏の正面には神様が祀っている（写真72）。摩梭人の宗教は自然崇拝に近く、毎日神様にお祈りをする。囲炉裏の神は火の神で、特に格が高く、火が消えないように寝るときは灰をかけ



【写真73】 村の広場の中心にある焚き火の向こうで待機する白いスカートの摩梭娘



【写真74】 ダンスをする摩梭美人たち



【写真75】 我われを案内してくれた摩梭人のガイドさん

て熾きを残す。囲炉裏は尊いから唾を吐きかけてはならない。輪廻の思想があり、死者を弔う作法は厳しく決められている。

摩梭人の社会は典型的なゲマインシャフトで、レジャー、舟、乗馬、焼肉場などの施設は共有財と考えられており、地域の経済活動は共同で運営管理されている。村の収入は村の組織を通じて仕事に応じて世帯単位に分配される。ただし農業と最近始まったホテル経営は個人の収入となる。湖の汚染対策として尿尿は集中処理されている。1994年に電気が通り、1996～1998年頃からテレビや冷蔵庫が使われるようになった。電気が来るまではバイオガスを使っていた。村は国に税金を払い、国からは補助金をもらっており、両者の関係はうまくいっている。ホテル経営には外部資金も入ってきているが、地元民との対立は生じてい

ない。観光地化される以前でも自然の恵みで十分自給自足が可能だった。泥棒はいないので、豚肉を外に干しておいても盗難にあう心配はない。男性には自分の部屋は与えられないが、夜は女阿夏のところへ行くので不便は感じない、と彼はいう。話だけを聞いていると、まことに「地上の楽園」そのものである。

夜は8時から村の広場で、中央の焚き火を囲んでダンスが行われた(写真73)。摩梭女性の民族衣装は、長くて白いスカート、腰に巻いた華やかな帯、そしてピンクの髪飾りが印象的である(写真74)。100人近い男女(大部分が女性)の熱気あふれる踊りは1時間半も続いた。見せるためのショーというよりも、自分たちが楽しんでいる祭りとの印象が強い。観光客も一緒になって踊ったり歌ったりする。「人間は面白おかしく遊んで毎日暮らせるのなら、それでもいいのではないか」という気持ちにふとさせられた牧歌的な社会である。ただし現実には厳しい。我われの瀘沽湖ツアーのガイドさんは若い摩梭女性で、19人家族、4人姉妹の子供たちと一緒に暮らしている(写真75)。なぜか彼女だけはガイド用の民族衣装を着ていなかった。彼女は1000元の月給の中から実家の妹に200元の仕送りをしているが、2週間に1度しか家に帰れないため、麗江への帰路、携帯電話で連絡をとって道路端でその200元を仲介の知人に手渡していた。彼女の妹が3人連れで歩い

ているのに偶然出会った。3時間歩いて学校に通うのだという。彼女は我われの一人に将来への希望が見えない不安を告げた。話だけを聞くと原始共産制社会に近い「地上の楽園」のように思えるが、近代化の波は確実に摩梭人の心に影響を及ぼしている。

8月21日(日) 麗江 僑鑫大酒店

昨晩は踊りが終わってから暗闇の中を連れてこられたのでよく分からなかったが、朝になってよく観察すると、宿泊した魯汝家園という民居は2階建ての真新しいログハウスである(写真76)。1室ツインベッド方式でトイレと洗面所は別棟にある。トイレに仕切りはないが、1泊するだけであるから格別不便は感じない。すぐ先の湖畔まで歩いて行くと、石造りのマニ塔を回りながら村人が朝のお祈りをしている(写真77)。張さんが「5

回まわるのよ」と教えてくれる。透明度12mの湖水(写真78)の測定値は、EC:213、pH:8.66、N27°40'57"、E100°46'20"、標高2690mで、周りに民家があるのに汚染されていない。別棟の食堂で朝食を済ませて、麗江へ向かって同じ山道を引き返す。田舎のレストランでの昼食は90円でこれまでで最も安い。このレストランの便所は谷川の水を利用する天然水洗方式だったが、汚水は処理をせずに金沙江へ直接流し込んでいた。金沙江の導電率が高かった一因であろう。さらにその先のバイオガス村で車を止めて、あるレストランでバイオガス施設の使用状況を見せてもらった。写真79にあるメーターの付いた細いビニール管がバイオガスの管である。このレストランでは、かまどは薪で、プロパンガス(写真80)も練炭(写真81)も使っており、電気も来ている。同じ山道ではあるが下りは速く、午後4時前にホテルに



【写真76】真新しい摩梭人の民居(民宿)



【写真77】マニ塔を回りながら朝のお祈りをする摩梭人



【写真78】透明な瀘沽湖の水



【写真79】レストランの調理場で見たバイオガスのパイプ



【写真80】 レストランにあったプロパンガス



【写真81】 レストランにあった練炭

着いた。

**8月22日(月) 香格里拉 (シャングリラ) 迪慶交
通賓館 ★★★**

今日の目的地である中甸は雲南省最北端に位置する迪慶藏族自治州の州都で、標高3300mに近い高地にあり、2002年5月に行政地域名を中甸から香格里拉 (シャングリラ) に変えた。シャングリラ (Shangri-La) とは、英国の作家ジェームズ・ヒルトンの小説『失われた地平線 Lost Horizon』(1933年刊) に出てくる桃源郷・理想郷に近い場所である。小説では、1931年5月に4人の白人を乗せてペシャワールへ向かっていたイギリスの飛行機が乗っ取られ、カラコラム山脈を越えて秘境シャングリラの付近に不時着する。シャングリラで彼らが見たものは、千古の氷河が懸かかる山や、想像を絶する神秘的な深い谷で、そこでは原始林、肥沃な草原、そして澄んだ湖に囲まれて、様々な宗教を信じる人々が穏やかに暮らしていた。その神秘的で色彩豊かな場所は、地上の浄土と噂されるようになり、ハリウッド映画にもなって大ヒットした。シンガポールにはシャングリラという名前的高级ホテルがある。ミヤンマー、チベット、タイなどがシャングリラの候補地を名乗り出たが、認められてはいなかった。1996年に中甸にやって来たシンガポールの旅行業者がこのような情報を、彼を接待した地元の党書記長に伝

えた。1997年に雲南省の専門家グループが調査を開始し、中甸県の自然環境、人文景観、風俗習慣が小説の世界に似ているとの結論に達し、雲南省や地元の指導者を集めてシンポジウムを開いた。そして木材産業だけしかなかったこの地方に観光産業を育てることを目標にして、中甸県をシャングリラ県に変えると宣言した。2002年になって中国国務院がそれを認めた。2005年8月現在、シャングリラは町を挙げて道路を整備し、街路樹を植え、ホテルを建てるなどして、桃源郷の基地に相応しい町へと変身中である。果たして何十年後かに再び訪れたとき、シャングリラはカナダのバンフやスイスのグリンデルワルトに匹敵する世界的な保養地に変容しているだろうか。

朝、蕭さんとお別れし、張さんとも一旦別れてシャングリラ (人口5万) に向かう。今日のガイドは地元の旅行専門学校を卒業した屈強な藏族の若い男性で、月給は2000元、シャングリラでは高級取りに属する。まず石鼓の「長江第一湾」へ行く。ここで金沙江は135度の急角度で曲がり、流れの向きを北へ変える。しかし地形の規模が大きいので普通の写真ではその鋭い曲がり表現できない (写真82)。市販の絵葉書では空中から撮影した写真が用いられている (写真83)。この絵葉書がいつ撮影されたものかは不明だが、これら2枚の写真を比較すると、山地の植生がかなり回



【写真82】金沙江（長江）第一湾



【写真83】金沙江（長江）第一湾の絵葉書

復していることが分かる（ただしこの絵葉書の空中写真は、写真82の地形と比較すると少し違っているが、これは写した方角が違うためかもしれない）。川水の色の違いは雨季と乾季の違いであろう。したがって写真に写っている植生の違いに、季節の違いが関係しているかもしれない。なおこの地方では2日前に10年ぶりの洪水があったばかりであり、次なる名所、虎跳峡へ行く道は土砂崩壊で通行止めだった。この場所では金沙江の川幅が狭まっており、虎が跳び越えたという神話があることからこの名がついた。金沙江の支流である小中甸河の水質は、EC：162、pH：8.39、水温13.6°C、N27°13'48"、E100°01'28"、標高1985mで、流量は多くまだ洪水の影響が残っていた。ラサへ通じる有料道路1600kmが2005年3月に完成し、料金所の建物を建設中であった。この道路の開通で、雲南省からチベット高原にかけての観光開発は加速されるであろう。苦ソバの畑、そして水力発電用のダム建設現場を通過する。徐々に高度が高くなって3000mを超えた。標高3000m以上はすでにチベット高原の一部であると教えられて驚く。チベット高原では青稞というチベット麦しか育たない。3月に種をまき9月に収穫する。この麦は粘りがなくて蒸しパンはつくれないが、麺はつくれる。青稞酒は地酒である。空気が薄くなって、激しく動くと胸がどきどきするので、ゆっくり行動するように心がける。退耕還林は長

江の大洪水がきっかけで考え出された政策で、1998～99年頃に始まった。道路沿いの畑で植樹用に高山柳の苗木を栽培している。植生は原始林といっても樹齢100年程度のものしかなく、二次林が多い。土地の人の現金収入は年100元程度で、産業はスギ、クモスギ、レイスギなどの林業しかない。民家は2階建てで、湿度が高いため1階には家畜、人は2階に住んでいる。

シャングリラに到着し、聚香園というレストランで昼食、105元、高原キャベツが甘くてとてもおいしい。ただしシャングリラの市街は建設途上にあり、その街並みはまだとても桃源郷の基地とはいえない。ホテルにチェックインしてから納帕海湿地性草原へ行く。この草原にしみ出す湧水の水は、EC：326、pH：8.64、水温16.5°C、標高3275mで、明らかに放牧されている家畜の尿尿で汚染されている。納帕海はこの草原の中心にある浅い湖で、流入する水の量に応じてその湖面積は季節的にも、年によっても、大きく変動する。湖水の測定値は、EC：300、pH：8.12、水温25.2°C、N27°52'54"、E99°39'13"、標高3270mで、湧水の値と大差がない。湖の周辺は湿原で、馬に乗ってしか行けない（写真84）。馬は小型のチベット馬で、乗り賃は30元。馬の持ち主である地元の老人に話を聞く（写真85）。彼は63歳で、年収は7000～8000元、馬は一家に2頭、畑は6ムーある。37歳の娘とともに観光用乗馬の手綱を引いて生



【写真84】 シャングリラの納帕海湿地性草原



【写真87】 レストラン用に新築された蔵族の民家



【写真85】 草原で休む蔵族の老人



【写真88】 蔵族の民家の居間の仏壇



【写真86】 草原で土を掘る黒豚

計の足しにしている。村の戸数は150戸。7月に草丈は20cm くらいまで伸びる。草原には馬のほかにも黒豚も放牧されており、黒豚は土を掘って草

の根を食べ、しあわせそうに泥浴をしていた（写真86）。紐に繋がれた観光写真用のヤクも1頭いた。政府が管理している景区と比べてこの草原にはゴミが沢山落ちていた。立派な造りの蔵族の家をいくつも見かけたが、これらはホテルやレストランなどで観光客目当てに最近建てられたものが多い（写真87）。

蔵族の民家の中を見せてもらう。居間は40～50畳くらいの広さで、片隅に仏壇があり、その上に3枚の額が掲げられている（写真88）。中央の黄色い帽子をかぶった人物は地元のラマ教最高位の僧で、その右側は仏教の最高位の僧、左側は高さ6740mの梅里雪山と月の写真である。毛沢東の人氣も高い。仏壇の前の囲炉裏には3つの縦型の鍋



【写真89】 蔵族の若いお嫁さん



【写真91】 バター茶を攪拌する李さん



【写真90】 蔵族のおばあさん



【写真92】 バター茶、ヤクのチーズ、炒った青稞粉



【写真93】 棚の上に積まれたヤクのチーズ

を同時にかけることのできる独特の仕掛けがしてあり、燃料は薪で、囲炉裏の上は吹き抜けになっている。囲炉裏を挟んで向かって左側に女性用、右側に男性用の長椅子がある。対応してくれたのは22歳の若い主婦で（写真89）、彼女の夫は27歳でタクシーの運転手をしており、年収は8000元。結婚5年目で子供が1人おり3人で暮らしている。夫の父はすでに死亡し、68歳の母は隣に26室のホテルを建てて別居し、そのホテルを経営している。その母が偶然にも嫁を訪ねてきた（写真90）。この家は築16年で、1階で乳牛3頭と黒豚6頭を飼っており、自給自足ができる。トイレはなく家畜小屋で用をたす。しかし家にはプロパンガスも、電気釜もある。発酵茶・バター・塩・砂

糖を混ぜたバター茶をご馳走になる（写真91）。お茶請けはコテージチーズの味がするヤクのチーズと炒った青稞粉（日本の昔の香煎に似た香りがする）で、チーズにはざらめ砂糖をつけて食べる（写真92）。このヤクのチーズは食器棚の上に重ねて積んであり（写真93）、梁にはハムや2つに

割った豚の頭などが吊るしてある。居間の隣のベッドのある寝室まで覗かせてもらったが、寝室への入口は外側からしかなく、居間との間は仕切られている。多分この家は、この地方では裕福な農家に属するのであろう。家々が南東を向いて建てられているのは偏西風の影響であろう。乗馬の老人と娘も、この家の嫁と姑も、皆とても親切である。結構バター茶の腹持ちがよく、夕食はホテルの前の安食堂で麺中心の軽い食事、50円で食事代の安値を更新した。

8月23日(火) 昆明 同じ桜花酒店★★★★

地元の言葉で「広い」という意味しかない中甸を、シャングリラと改名した理由は、町そのものが美しいからではなく（写真94）、この町の周辺地域の生態環境や風俗習慣に観光資源としての高い価値を認め、観光開発に踏み出すためである。その誇るべき自然の1つが昨日訪れた納帕海とその周辺の湿地性草原であるが、それ以外の自然としては梅里雪山、緬茨姆峰、白馬雪山、香格里拉大峡谷、白水台、属都湖、碧塔海などが絵葉書や観光地図で紹介されている。これらをすべて含めてのシャングリラ県である。自然は変化するので、いろいろな季節にこれらの場所を訪れなければ、野山の色彩の移り変わりなど、その本当の美しさはわからない。ただし簡単にたびたび来ることのできる土地ではないのが残念である。



【写真94】土管を埋設中のシャングリラ市街地

今日はまず属都湖へ向かう。チベット高原の南東端に位置するこの「広い」中甸では池や湿地を各所に見かける。標高が高いため、蒸発量も少なく、傾斜も緩いため、水が溜まりやすいのであろう。いまの季節には牧場のヤクは山へ送られていて見ることはできないが、山に雪が積もる季節になればヤクは山から降りてくる。100頭ものヤクを所有する農家もある。1998年にこの地域で最初に観光を始めたという村を通過する。この村で新築中の農家が多いのは収入が増えたからであろう。新しい舗装道路ができ、料金所も建設中であった。行きの山道で氷河のターミナルモレーン（端堆石）と思われる堆積物を車中から見つける（写真95）。目的地に着くと案内板には、属都湖は「高原氷積湖 Alpine Glacial Lake」であると書いてあり、その下に「尊重自然 保護環境 発揚文化 延続歴史」とある。文化や歴史にも触れているところが、いかにも少数民族の自治県らしい。さすがに湖水はきれいで、EC: 35、pH: 7.7、水温 15.1°C、標高3614m。この値なら日本の山の湧水に勝るとも劣ることはない。雲南の水で（汚染がないと考えてもいい）100 μ S/cm以下の導電率を観測したのはここだけだった（写真96）。湖畔の草原で乗馬を楽しんでいる観光客もいる（写真97）。帰り道にあのモレーンの手前で車を止めてもらう。予想した通り、ここから見通せる山の頂付近に氷河地形の存在を確認することができた



【写真95】道路端で見つけたモレーン（氷河堆積物）



【写真96】 雲南省で最も水がきれいだった属都湖



【写真97】 属都湖周辺の草原で乗馬を楽しむ観光客



【写真98】 モレーンを押し出したと思われる山の頂に残る氷河地形



【写真99】 退耕還林のために家畜が入らないように囲った粗朶垣

(写真98)。この山は属都湖よりも標高が高いから、この山に懸かった氷河が写真95のモレーンを押し出したと考えてもおかしくはない。第四紀にチベット高原全体が氷床に覆われていたか否かについては、今のところ意見が分かれているが、標高3600mで氷河地形の存在が確認できたのは予想外の収穫だった。モレーンの近くの山麓で退耕還林の実例を見た。昔の耕地の道路側境界を石垣や粗朶垣で囲い、山側や側面には棘栗を植えて区切っている(写真99)。棘栗が成長すれば家畜は中へ入れなくなる。山腹には植生が戻っていたが、残念ながら退耕後に囲いの中に植えられた木はうまく生長しているようには見えなかった。藏族民家造りのレストランで食べた昼食は140円で、この中には最も値段の高い40元の羊のスープが含まれている。

シャングリラに戻り雲南省最大のチベット仏教寺院である松贊林寺を見学する(写真100)。松はチベット語で3、松贊で3人の神様の意。ここにはかつて南側に池があり、背後には山をひかえており、風水の理にかなった場所だった。僧は6000人おり、高僧は黄色の僧衣を着ている。文革で破壊されたが、80年代に修復された。参詣客は多く、お堂の中は人で一杯だった。高地だけあって満員のお堂の中は酸素不足で、胸苦しさを感じ、足がふらつく。寺は高台にあるのでそこから藏族の集落が望める。この集落の手前に見える大きな垣根のように連なった三角形の木組みは青稞麦を干すためのもので(写真101)、刈り取り時には畑へ移動する。湿度の高い土地だからこのような高い干し場が必要なのであろう。この地方は野生きのこの山地であり、松茸は日本へも輸出



【写真100】雲南省最大のチベット仏教寺院である松贊林寺



【写真101】藏族の集落



【写真102】中甸空港の外に立っていた「共建和諧社会 發展香格里拉」の看板



【写真103】中甸空港の中で見つけた「倡導」の文字

される。店では乾燥松茸が安く売られている。お土産に買って帰ったが、あまり美味しくはなかった。8月23日の地方新聞は、中央から来た考察団の調査結果に基づいて、国家林業局が雲南省を「生態立州・文化興州・産業強州」にすることに決定したと報じていた。林業から観光産業への移行は着々と進行している。観光産業の発達に伴って林業の仕事も増えたが、増えた仕事は環境保護に関連するものが主である。中甸空港の内外の看板に「和諧」と「倡導」の文字を見つける(写真102、写真103)。いずれも今回の旅で確認した、中国の環境政策を考える上での重要なキーワードである。夜の便で中甸空港から昆明空港へ1時間足らずで飛び、前と同じ桜花酒店に着いたのは夜の9時半であった。夜も遅いので外へは出ずに、夕食はホテルのレストランでスパゲッティとスー

プで軽く済ませたが、1人44元であった。

この調査報告には中国の物価の現状を知るために、気がつく限り食事の料金(すべて全員の分)や労働者の月給や年収を記録しておいたが、スパゲッティとスープで44元もするホテル生活をしていただけでは庶民の金銭感覚がつかめないことがよく分かる。これは世界中どこでも同じことではあるが。なお、ホテルで入手した昆明青年旅行社の「雲南旅游經典路綫」によると、昆明を発着地にして我われが訪れたと同じような場所を巡る団体旅行は、3食込みで、飛行機を利用した「大理・麗江・西双版納6泊7日の旅」が1人1360元、汽車を利用した「大理・麗江・香格里拉6泊7日の旅」が1人1280元であった。日本円に換算すると2万円程度で1週間の観光旅行が楽しめる。現在の為替レートなら、雲南では日本の10分の

1 くらいの費用で暮らせる感じである。

8月24日(水) 昆明 同じ桜花酒店

今日の目的地は昆明の北200kmほどの所にある中国科学院東川泥石流観測研究所で、張さんはここで博士論文の研究を終えたばかりである。再び張さんが我われ一行に加わり案内をしてくれる。昆明中心部の市街はきれいには見えるが、この都市はまだ中国で認定された50あまりの「花園都市」の中には入っていない。花園都市は緑の面積などいくつかの基準を設けて審査している。昆明を出て高速道路を1時間ほど走りガソリンスタンドで給油する。その近くにはキャベツ畑が広がり、巨大なビニールハウスの中で瓜のようなものを栽培している(写真104)。東川地区は鉱山資源に恵まれ銅、亜鉛、金などを産出する。年降

水量は1000mmくらいで、山地の植性は雲南省の南部に比べると貧弱である。鉱山活動による土地の荒廢で地すべりも多い。この研究所一帯の地質は脆弱な頁岩(泥岩の一種)からなり、研究所付近の頁岩は手でも割ることができるほど柔らかかった。石林と同様に過去の激しい地殻運動が原因である。途中で高速道路を下りて斜面につけられた屈曲の多い山道を走る。畑が少し波打っているように見えるのは地すべり地帯の特徴である(写真105)。車中から山羊やロバ(写真106)、羊、ユーカリやアロエ(写真107)、サボテンなどをしばしば目にして不思議に思う。研究所に着いて、技術者の洪勇さんから説明を聞き(写真108)、現地の地形や植生、観測施設などを見せてもらう。

この研究所は1961年に設立された。この地域では銅などの鉱山開発が早くから行われており、



【写真104】 東川へ向かう途中で見たキャベツ畑とビニールハウス群



【写真105】 地すべり地帯の波打っている畑



【写真106】 行く手をさえぎる山羊やロバ



【写真107】 道端に植えられたアロエとユーカリ



【写真108】中国科学院東川泥石流観測研究所で洪勇氏（向かい側左端）から話を聞く一行



【写真109】山腹に残っている地滑りの跡



【写真110】東川泥石流観測研究所の建物



【写真111】小江流域から流出する膨大な量の土砂

土石流（＝泥石流）による道路や鉄道の被害が多発したので（写真109）、鉱務局、当時の東川市（今は昆明市の区）と中国科学院が共同で研究を開始した。1970年代初めに東川市が手を引き、中国科学院が単独で研究を行うようになった。1980年代になって中国科学院の重点援助を受け、1984年には全国5箇所の重点野外調査地点の1つに認定された。2002年に中国科学院の資金援助を受けて現在の建物が建った（写真110）。研究目的は土石流観測研究と自然生態回復の2つで、研究は世界の最先端を行っていると自負しているとのこと。京都大学防災研究所ともこの場所で共同研究をしている。研究内容の詳細は専門的過ぎるの

でこの報告では省略するが、還林も重要な任務の1つである。金沙江の支流である小江は「土石流天然博物館」とも呼ばれているくらい世界的に有名な流域で、この研究所の位置する蒋家溝流域は小江流域内にある107の土石流谷の1つである。小江流域から流出する土砂は年間4000万トンと推定されており（写真111）、長江の治水利水にも深く影響を及ぼしている。生態回復研究は砂防ダムと植樹で行っている。この研究所の裏山で生態回復研究を開始した1988年頃は、地元の農民はここに木を生やすのは無理だと言っていたが、彼らの協力を得て現在の状態まで回復させることができた（写真112）。最近では農民も考えを変え、苗や種を求めに来るようになった。植物には銀ネム、ユーカリ、アロエのほか畑には落花生やトウモロコシなども植えて、生物の多様性が保たれるように工夫している。降水量が多くはないので、



【写真112】 植生が回復した研究所裏の斜面



【写真114】 東川区水務局の看板



【写真113】 植生による土砂防止効果を測定するための実験斜面



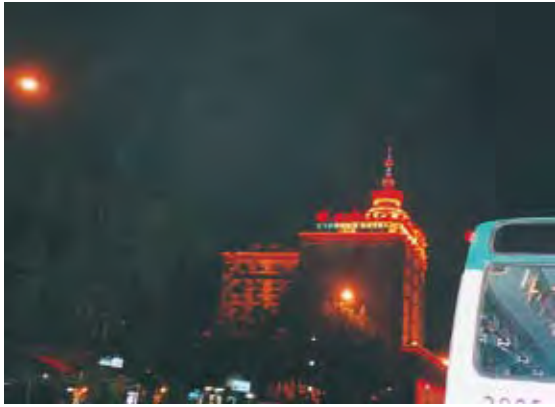
【写真115】 三輪車の走る東川中心部

植樹は日陰斜面では成功率が高いが、日向斜面では難しい。植生回復による土石流防止効果については、植生を変えた3種類の実験斜面を設けて観測を開始したばかりである（写真113）。蔣家溝の水を測定すると、EC：876、pH：8.26、水温20.7°C、N26°14'47"、E103°08'03"、標高1340mで、導電率が異常に高いのに驚く。もろい泥岩地帯だからであろうか。

土石流地域の農民は利用権をもって耕作している。従って、その利用権を持つ農民の意向を聞きながら、土石流調査をしている。調査を行うことによって、農民に耕作の機会とヒントなどのメリットを与えているが、農民の意向を聞き、調整

している時間と労力が、調査を行う側にはデメリットを与えている。ユーカリ、アロエ、アカシアの組み合わせが土壌流失を防ぐ効果があるが、それぞれの特徴をいかした組み合わせである。アロエには動物の進入を防ぐ役割がある。まさに、多様性の組み合わせである。

帰路、東川の役所に寄ったとき「昆明市東川区水務局」の看板を見てたずねると、中国政府は最近、旧水利局などの水関係の部局を統合して「水務局」を新設したとのこと（写真114）。水の縦割り行政に悩まされている日本人にとってはうらやましい行政改革である。東川区は昆明市の一部だが、中心部でもまだ三輪車の世界である（写真115）。東川で泊まる予定だったがホテルの手配に手違いがあり、問い合わせたら桜花酒店で宿泊可能との返事で、遅くなったが昆明へ戻る（写真116）。



【写真116】昆明の夜景

8月25日(木) 北京外国專家大廈 ★★★★★

昨夜のうちに昆明へ戻ることができたので時間に少し余裕ができた。雲南大学亜州国際河流中心主任兼生命科学院副院長の何大明教授を訪問して話を聞く（写真117、写真118）。この研究所は、研究対象を中国国内に限定せず、アジアの国際河川としている点で、中国の研究所としては極めてユニークな存在である。何さんは、学士は四川大学で陸水水文学と水資源学、修士は南京大学で自然地理と国際河川管理、博士是北京師範大学で劉昌明教授の下で環境保全を研究し、それぞれ学位を取得したが、社会学にも強い関心を持っていると自ら語るマルチ型の研究者である。このセンターには何さん以外に、林学専攻のリモートセンシングの教授、国際河川に関心のある水資源の教授、中国科学院植物研究所から来た生態学者、

GISの専門家、法律の専門家、気候の専門家がスタッフとしているが、特に定員の定めはない。1人で1分野を担当することができ、国際交流に関心のあることがスタッフ採用の必須条件で、年齢30歳以下なら博士の学位、40歳以上なら教授資格も必要条件に加えている。使用言語は英語で、フィールド調査が多いので採用は男性に限定している。研究資金は国内からはもちろんのこと国際機関からの資金も多いので年間1000万元ほどあり、1人1年間に100万元は使えるが、採用条件が厳しいため、いつも人材不足の状態である。このセンターは1998年に雲南大学の内部組織として発足したので、国際問題を研究対象とするにもかかわらず設立は比較的容易だったが、もしも雲南地理研究所の内部で設立しようとしたら無理だったと何さんはいう。彼は我われに雲南省の環境事情と、このセンターの活動状況の2つについて以下のように話してくれた。

まず雲南省の環境事情についてであるが、雲南省はいま開発と保全のバランスをどのように保つべきかという困難な問題に直面している。その構造的な原因は経済発展第一主義にある。この省では、地球温暖化による僅かな気候変化によっても、洪水、土石流、地すべりが多発し、地震の被害も多い地域なので、生物多様性の維持は難しい。今年には20年ぶりの大旱魃だった。例えば昨日皆さ



【写真117】雲南大学亜州国際河流中心の入口



【写真118】雲南大学亜州国際河流中心で何大明教授（向かい側左端）から話を聞く一行

んが訪れたという小江流域では、清代に銅生産の燃料として森林が伐採された。雲南省は古くから開発の行われた地域で、人口が多く、社会問題も多い上に、都市の開発が自然に負担をかけるという問題や、漢民族と少数民族の衝突も起きている。環境問題の研究は、いくら研究資金を投入しても足りないくらいで、成果もすぐには出ない。ただし雲南省西部のような交通が未発達で開発の遅れている地域では環境は破壊されていない。雲南省北部地域では伝統的な生活様式と近代的な生活様式との衝突が起きている。発電用ダムによる生物多様性の破壊も問題である。東南アジア経済圏に属する南部地域では、経済活動と生態環境との両立をいかにして可能にするかが新たな問題として浮上した。雲南省東南部では石灰資源開発、土壌劣化、大気汚染、石炭開発などの環境問題が発生している。今後に予想される問題としては、豊かな自然環境と安い労働力に吸引されて、この省への工場進出が始まるのではないかと懸念している。そのとき自然の多様性に根ざして成立している文化の多様性を如何にして守るかという問題が生じるだろう。麗江を例にしても分かるように、伝統文化の保護には多額の資金が必要であるが、公的資金には限りがあり、伝統文化の喪失は徐々に進行している。雲南省には6河川の源流があり、長江以外の5河川は国際河川である。上流の自然環境破壊が下流に与える影響については、まだ文献調査の段階でしかない。国際河川をめぐる資源利用と河川環境保護は極めて重要な問題である。

本センターでこれまでに実施した主なプロジェクトは、①縦（南北流）河川生態多様性国際研究、②瀾滄江水資源配分研究、③雲南省の水と環境変化の研究、④国際高速道路建設の原始生態系への影響研究、⑤国家自然科学基金による研究、⑥企業からの委託研究、⑦WWF資金による貧困と環境自然保護の研究、⑧メコン川流域の国際研究などである。ワシントン大学との連携プロジェクトも計画中である。①は中国西南区では初めての大型プロジェクトで、延べ200人以上の研究者が参加し「環境外交」にも大きく貢献した。⑥は基本的には受託しない方針だが、ダム建設の下流への影響調査などは受託した。すでに終了したプロジェクトもあり、ホームページや報告書などで成果は公表している。本センターは国家の重点研究拠点の指定を受けている。メコン川流域委員会やアジア国際河川流域委員会とも連絡をとっている。その意味で、本センターの名称については、私は良い名前だと思っている。ただし私のような活動を行っている人は少ない。現在は一応、私は、環境保全の立場から研究者としての意見を述べているが、政府機関との対立が生じれば黙るしかないというのが偽らざるところである。例えば今年の4月、ある問題に関連して開発側が私と対決させるために偉い先生を雲南へ連れてきたが、私はその間3日ほど姿を隠した。何といっても開発側には利益が多いという強みがある。

何さんの話は具体的で、生々しく、環境問題研究の根幹に触れる大変有意義な内容であり、この調査旅行の最後を締めくくりに相応しいものだった。あえて国際的な環境問題を取り上げたという着想もすばらしいが、このセンターの研究に十分な資金が集まるのは、やはり雲南という地域が有する「多様性に由来する魅力」に人々が吸引されるからであろう。午後2時20分の便で北京へ飛ばなければならないので、昨夜のうちに昆明へ戻っていたにも拘わらず、十分に議論する時間がとれなかったのはとても残念だった。何さんの招待で、昼食は昆明新世界飲食娯楽策劃管理有限公司という昆明の3大雲南料理の店で名物の過橋米綫などをご馳走になる。過橋米綫（一種のしゃぶしゃぶ料理）を食べなければ雲南に来たことにはならないそうであるが、我われには初めての経験であった。だからと言って、これまで我われが粗食に耐えてきたというわけでもない。あの値段でも食事は十分おいしくて、何よりもヘルシー

だった。このレストランでは昼間からステージの上で若い女性の華やかなダンスのショーが行われていた。雲南省ではレストランも多様性に富んでいる。昆明空港から約3時間で北京空港へ着く。空港の到着通路を歩いていると「環境帝国中の私人酒店 Private Club across the Environment Empire」という大きな看板が目につく。この看板の意味するところはよく分からないが、中国にも「環境」という言葉が商売に役立つ時代が来たようである。

8月26日(金) 帰国

大澤は北京にもう1日滞在してエネルギー問題の調査を行う。残りの4名は全員無事に帰国することができた。強行軍ではあったが、極めて意義深い調査旅行であった。

(本報告中の写真の撮影者はすべて榎根勇)

個人的意見

榎根 勇：中国の環境政策の特徴として、トップダウン的手法には強いが、ボトムアップ的手法に弱点があげられる。今回の雲南省の調査で、中国がトンネルルートを通して「次なる社会システム」を構築するための具体策を考えるに当たって、雲南省が果たすべき役割は極めて大きいと感じた。その理由は、雲南省が、①自然的にも人文的にも多様性に富むこと、②少数民族の多い地域であり、ある程度の自治が認められていること、③太陽エネルギーと水に恵まれた自然の豊かな地域で、環境復元の可能性が高いこと、④これから開発が進む地域であること、⑤観光資源に富むこと、⑥国際河川を持つこと、⑦中央から離れた辺境に位置することなどの条件が、「次なる社会システム」構築に有利に働くと考えられるからである。これらの条件が、具体的にどのように有利に働くかについては、今後の現地調査を必要とするが、私としては、水の専門家として、水の流れを巧みに

に利用して美しいまちを作り上げた麗江を例に「水をつなぎ手として」考えてみたいと思っている。麗江は中国の京都であるとも、京都が日本の麗江であるともいわれる。京都も水の流れを巧みに利用してつくられた古い都であり、2つの古都が世界文化遺産に登録されていることは、文化の形成に果たす水の役割の重要性を歴史的事実として示している。環境問題の基本は、自然と人間の関係は如何にあるべきかを考えることであるが、自然と人間の関係性という抽象的な問題を、具体的な自然として水を取りあげて、麗江を例に調べてみることは、中国の今後の環境政策を考える上で重要だと思う。

宮沢哲男：これまでモノトーンの卓越している半乾燥・乾燥地域（タクラマカン、山西省）を中心に調査してきただけに、今回の雲南省の調査旅行は景観的にも文化的にも大変新鮮な印象を持った。景観的にはダストのないクリアーな大気と緑の濃い森、そして標高3000メートル以上の高原での巨大な雲杉の倒木が木々のあちらこちらに横たわっている景色に初めて接した。倒木は、気温は低い雨量が多いせいで苔むした状態のまま長期間保存されている様子で、タイガの夏の景観もこのようなものであろうかと想像する。これが熱帯の雨林であれば倒木は簡単に分解され跡形もなくなって物質循環系に戻されるであろうに。文化的には25の少数民族が雲南省で生活しており、それぞれが独立した文化を持ちつつ、共通な部分も多々見られる。民族衣装から見ると、原色の多い色合いが好みのように思われる。それぞれデザインが異なるのだが、民族と衣装をセットで区別できるほどの眼力と記憶力のないのが残念である。長江上流部のチベット族の多い村ではヤクや羊の放牧が見られる。ヘアリングをしたチベット族の民家でご馳走になったバター茶と炒り粉&チーズは、かつて河口慧海が好んで食したもの（バターで捏ねた炒り粉）とよく似ていると勝手に思

いながら感動しつつ食した。チーズはヤクの乳から作ったもので、カマンベールのような或いはバターチーズのような食感で、脂肪分の多いこってり感もあって幾度もお皿に手を伸ばしてしまった。

今回の宮沢の主目的は、中国の環境 NGO の指導者である陳永松氏と于曉剛氏へのインタビューと来年開催予定の「現代中国とアジア世界の人口生態環境問題」研究会への講演依頼であったが、幸い中国科学院の宋献方教授のお世話ですべて無事完了した。

大澤正治：土石流、少数民族など中国の環境問題を考える重要なキーワードも勉強したが、以下の2点については、今後、詳細な調査を実施したいと考えている。

1) 観光と環境 中国経済発展につれ、資金とともに人々が移動し始めた。今や中国に観光ブームがおこっている。日本の観光は、ブームの後に環境問題の意識が高まったが、中国では環境問題

の意識の高まりの後に観光ブームが起こっている。このパターンの違いに注目したい。特徴は団体で移動すること、環境保全に配慮した開発、しかも個々の資本による開発の集合ではなく地域全体としてのビジョンがあること（このなかに少数民族の問題を絡める考え方もあることには関心を寄せた）、ガイドのステータスが高いこと（エコミュージアムの学芸員的な性格を感じた）など。気になったことは情報の発信が十分とはいえないこと。今後、文化の維持との関係、国際的ツーリストの受け入れなどに注目したい。

2) 国際河川管理 河川汚染、生態保護など地域レベルの問題の国際的アプローチのあり方が注目される。2005年末に起きた松花江汚染問題も国際河川の環境問題となっていることから今後、重要な課題となる。とくに、中国の様々な国境はまさに、環境と開発のバランスを国際的にとる難しさがあるが、アジアを様変わりさせ、アジアの勢力地図を変えるきっかけになる潜在性も秘めていると思われる。